

# 複数作品の比べ読みを通して 生徒の考えを広げる高校古典の授業実践

M17EP010  
保坂加奈子

## 1. 問題と目的

### (1) 背景

#### ① 古典学習への生徒の関心・意欲の低下

平成18年教育基本法改正、現行学習指導要領改訂等を契機に、伝統と文化への尊重、また言語文化を継承・発展させる態度の育成等への関心が高まった。高校国語科においては、従来その目標として「言語文化への関心を深め」ることが明記されているが、現行学習指導要領より〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が小中高を通して設けられるようになり、高校でもこれまで以上に生徒の関心を高める古典指導の工夫が求められている。

しかしながら、高校国語科の課題として中央教育審議会答申（H28.12）では、「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと」が指摘される現状がある。

#### ② 自己変容に迫る古典の可能性

本来古典学習は、生徒たちが作品との出会いを通して自身の考えを広げていけるというよさがある。それはつまり、登場人物や舞台、またテキスト表現等、作品を様々な観点から読むことで、その中で疑問を持ったり想像力を働かせたりするうちに、古典の世界がより具体的になり、言語文化への関心が高まり、自己の価値観の変容にまで迫っていけるというものである。

とりわけこれからを生きる生徒たちにと

っては、予測困難な社会を生きるために必要な資質・能力を育成することが課題とされ、学習内容を人生や社会との在り方と結びつけて深く理解していくことが求められている。こうした中、古典学習は、日本の言語の体系や歴史、読み継がれてきた文芸、その中で生まれた個性や価値を味わえるような教材を扱い、実社会を生きる生徒の拠りどころとなる思想・価値観を形成していくという現代的な使命を担うことができると考えている。

このように古典学習の重要性はより一層増しているのであり、高校ではより高いレベルで、生徒自身が主体的に「言語文化」と対峙し、内容や表現への理解を求め、その特徴や価値をつかみ取っていくような授業が望まれていると考える。

しかし、そうした言語文化への理解と実感を生徒に促せるような創造的な教材開発とその実践はそれほど多くないように思われる。そこで、古典学習への生徒の関心・意欲が高まらないという実態や小中学校で様々な古典作品に触れている状況を踏まえ、言語文化への関心を高められる創造的な教材開発、及びその実践についての研究が、必要とされていると考える。

#### ③ 単独作品の読みを深める「比べ読み」

言語文化への関心を高めるための、複数作品を組み合わせた教材開発ということについて、筆者は数年前から考えるようになった。きっかけは、生徒に古典作品を口語訳させた後、内容理解が表面的なもので終わっていたり、古典の知識がその作品の中での一面的な捉えで止まっていたりする生徒の様子しばしば

しば見られたからだ。そこで、単独作品での読みで終わるのではなく、その後、それと関連する作品を読ませることで、両作品の共通点を中心に生徒の中の作品のイメージがより具体的になっていくのではないかと考えるようになった。

しかし、実践の中で複数の作品をどのように提示していけばよいのかという課題に直面している。関連する作品をそのまま与えるだけでは、生徒の関心はさほど高まらず、かえって情報量が多くなり消化不良となる。また、教師が複数の教材を切り取り、組み合わせる等、教材を作りこみすぎると、教師の意図が見え透いた、教え込み授業になってしまう。だが一方で、生徒が驚くほど主体的に読みを深めていった時もあった。単独作品の読みの中で出てきた生徒の疑問を生かし、それに沿った教材を扱った授業や、教師の与えた学習課題について、グループで対話を繰り返しながら発表に取り組んだ授業などである。

古典の比べ読みは難しいという声をしばしば耳にする。しかし、生徒の生活経験から遠く、古語や文法知識の定着していない状態での古典作品の読みこそ、比較し整理分析することで、それをもとに話し合ったり想像力を働かせたりする学習ができるのではないかと考えている。そこで、本研究において、その教材のあり方や実践の手立てについて考えていくこととしたい。

## (2) 目的

「比べ読み」により生徒が自分の考えを広げ、作品の内容・表現をより深く理解できる授業実践について研究する。

## 2. 研究の方法

- (1) 実習校での参与観察
- (2) 先行研究の分析
- (3) 古典の「比べ読み」実践の意義と手立て
- (4) 教材開発と授業実践

- (5) 実践授業における生徒の記録の分析

## 3. 研究の内容

### (1) 実習校での参与観察

今年度は、多くの方のご協力により半年にわたる実習を行った。その中で、本研究と関わる部分について述べる。

#### 実習校での参与観察

期間：平成 29 年 5 月～11 月（計 200 時間）  
実習校：山梨県内の公立 A 高等学校  
主な国語科の参与観察：高 1「国語総合」（古典）、及び高 3「現代文 A」の授業

高 1「国語総合」（古典）の授業については、毎回 3 つの異なる授業者による、異なるクラスの授業を見ることができた。同教材を扱いつつも、教師のねらいにより授業デザインが大きく変わることを知った。また、ペアによる音読や補助プリント、基礎の確認テスト等、生徒の実態に合った授業の工夫をたくさん見ることができた。授業の目標や言語活動、それに向けた発問・指示・説明等の様々な観点で見ることで多くの気づきも得た。

高 3「現代文 A」の授業では、生徒の思考過程に沿って活動が組み立てられていた。ホワイトボードを活用したグループ活動時には、特に生徒が主体的に作品の読み深めを行っており、今回の実践において、学習形態やワークシートの工夫等、参考にさせていただいた。

### (2) 先行研究の分析

#### ① 「比べ読み」の先行研究

高校国語科学習指導要領では、「国語総合」「C 読むこと」に示される 4 つの「言語活動例」のうちの一つに「エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」とある。そして、学習指導要領解説には、「『様々な文章を読み比べ』るとは、古典や近代以降

の文章を問わず、また、文学的な文章、論理的な文章、実用的な文章を問わず、多種多様な文章を読み比べることである。」と述べられている。

船津（2010）は、「比べ読み」により「共通点と相違点を把握」することができ、そこから「その作品の特徴を捉える」ことができるという。また、「一つの作品を読んでいただけで気付かなかったことを発見したり、二つを結びつけて考えたりすること」が可能となるとも述べている。川上（2009）も「表面上の気付きが増え、その中から深い意味合いにまで気付きやすくなる」とし、表面上の気付きに留まらず、そこからさらに複数の事象を関連付けて自分なりに捉えようとする思考が働いていくことについて著している。

さらに川上（2009）は、「比べ読み」によって「批評する「観点（ものさし）」を持つことができ、「客観的・分析的に批評することができる」と言う。そして、文学的な知識・経験が少ない読者の場合、比べた方がその特徴をつかめると述べる。また、『比べ読み』でこの観点を獲得し、批評力を鍛えることで、一つの作品を示されても気付きが深くなり、客観的・分析的な批評ができるようになる。」（川上 2009）と記している。

### **(3) 古典の「比べ読み」実践の意義と手立て**

#### **① 古典の「比べ読み」の実践の意義**

これまでの先行研究により、「比べ読み」により、共通点と相違点を把握し、客観的・分析的に批評できることで読みが深まり、その特徴を捉えやすくなることが分かった。そしてそれは、文学的な知識・経験の少ない読者の方がより顕著であることも分かった。

現代の生徒にとって、古典世界は自分の生活経験から遠く、読むための知識等も少ない。つまり、古典こそ「比べ読み」を取り入れ、客観的・分析的に読むことで、作品の場面が具体的になり、作品理解が進むのではないかと

かと考える。

#### **② 古典の「比べ読み」の実践の手立て**

先行研究を進めていく中で、「比べ読み」の留意点が見えてきた。川上（2009）によれば「焦点化して比べる」ために教師の働きかけが必要だと言う。作品をただ素材のまま複数示されても、生徒たちがその意図を見出し主体的に読み進めていくわけではない。そこで、生徒が慣れないうちは、教師が「比べ読み」の読みの視点を限定し、学習課題を共有した上で、目的を持って作品を読むような学習指導の方がふさわしいと考える。読み手の主体性が確立されてきたときには、多くの作品やたくさんの情報を与えて自分たちで焦点化させたり、教材選びから自分たちで関心のあるもの、関連するものを持ってこさせたりするのが望ましいと考えている。

以下に「比べ読み」実践の手立てを挙げる。

##### **(i) 教材選択と焦点化**

読み比べる教材と読み深めさせる観点を教師が与え、学習課題を共有させる。

##### **(ii) 学習形態の工夫**

比較することに慣れない生徒もいる場合、仲間と気づきを確認し、読みを広げるグループ活動を取り入れる。

##### **(iii) 言語活動の工夫**

比べ読み後、元の作品の読みがどう変化したのかを、生徒自身が実感できる活動を入れる。

### **(4) 教材開発と授業実践**

「国語総合」の定番教材「伊勢物語」23段「筒井筒」についての「比べ読み」の教材開発を行う。それに基づいて実際に行った授業実践の概要を紹介する。

#### **① 「比べ読み」の教材開発**

今回、高校「国語総合」の定番教材「伊勢物語」の「筒井筒」（実習校と使用教科書の関係により2段落まで）を選定した。それと比

べる教材として、同じ文学ジャンルである歌物語の「大和物語」158段「鹿鳴く声」を組み合わせる。

### (i) 教材選択の観点

「筒井筒」と「鹿鳴く声」は、両作品とも「夫が最初の妻の詠む和歌に感動し妻のもとへ戻る」という歌徳説話であり、話の基本構成が似ており、また、古典における重要な言語文化である、和歌の価値やその力について描かれている点が共通している。

従来、教科書や指導書等で「筒井筒」に関連する作品として紹介されているのは、「筒井筒」と同じ立田山伝説がもとになっている、「大和物語」149段「沖つ白波」という作品である。この「沖つ白波」は、嫉妬する妻の心情が詳細に書かれているため、「筒井筒」の妻の内面が全く描かれていないことと比較して、「伊勢物語」のテキスト表現の特徴がとらえやすくなる。しかしながら、同じ伝承をもとにしているため、人物・舞台が同一設定であり、和歌も同一である。このように共通点がとても多いために、教師の意図が伝わりやすく、生徒たちは一読してその妻の描かれ方の違いに気付くことができるというよさがある一方、生徒たちは書かれていることを受け入れるだけになってしまい、新たな発見の楽しさが薄れてしまう。また生徒たちは、「沖つ白波」の女の本性のグロテスクな描かれ方に現代との隔たりを感じてしまい、同時に「筒井筒」のテキスト表現の価値についても納得せざるを得ない状況に置かれるのである。

他方、「筒井筒」と「鹿鳴く声」を合わせたときには、生徒たちの生活経験から想像しにくい歌徳説話を二種類、読むことができ、それについて具体的なイメージを持ちやすくなると思われる。また、異なる2人の中心人物（男）の特徴を捉えるという目的を持ってテキストを読み進めたとき、表面上の気付きからさらに読み深めていくことができると考

える。2作品の基本構成が似ており比較する箇所は見つけやすいのだが、内容・表現の異なる別の話であるため、それをどのように捉えていくかという点での難しさがあるのだが、それが考えていく面白さにつながる。それについても、それぞれの男の変容の違いをテキストの中で一つ一つ整理していけば、それを根拠にして仲間とも対話を進めていくことができると思う。

### (ii) 焦点化の観点

「比べ読み」から深い読みに到達するためには、まずその共通点と相違点をきちんと把握することから始まる。「筒井筒」と「鹿鳴く声」は、共通点よりも相違点が多い作品であるので、生徒たちの気づきを生かし、複数事象を組み合わせていく学習をさせるために、相違点に焦点化していくこととする。また、テキストの根拠に基づいて仲間と対話し、その相違点の意味するものを考えていけるよう、テキストを整理・分析できる観点を選ぶ必要がある。

今回、このテキストでは、それぞれの2人の中心人物（男）の変容を捉えることに焦点化していく。作品における中心人物は、その心情が比較的丁寧に記されている。また、同じ結末に至るが、それぞれの男の心理や行動はかなり異なっている。男の心理や行動は、現代の小説に比べると粗く描かれてはいるが、それでも同じ人間である以上、その普遍心理を表そうとしているのであり、生徒が想像力を働かせることも可能である。このように生徒が比較的寄り添いやすい、男の視点で考えさせ、その心を動かした対象、それぞれの和歌の内容を読みとらせ、和歌の価値や和歌の力に気付かせ、和歌という言語文化に対しての関心が徐々に高まっていくようにさせたいと考える。

### ② 授業実践の概要

実習校において、以下の要領で実践をした。

### 実践授業の概要

実践時期：10月中旬～11月上旬

対象：第1学年A組38名

単元目標：

- ・作品のストーリーのよく似た2作品を読み、それぞれの中心人物（男）の心情の変化を読む。
- ・2作品の女の和歌から、31音の和歌に表れる豊かな心情、また人の心を動かす和歌の力を実感し、和歌文化に関心を持つ。

言語活動：「筒井筒」と「鹿鳴く声」の比べ読みをする。その後生徒自身が「筒井筒」の男にインタビューする対談記事を書く。

使用教材：伊勢物語「筒井筒」（1・2段落）、大和物語「鹿鳴く声」（単元の振り返りの時間に大和物語「沖つ白波」も紹介した）

### 単元計画（全7時間）

#### 〔第1・2時〕

平安貴族の恋愛・結婚生活に関する知識を身につけ、プロポーズとしての和歌に親しみをもち、「筒井筒」の幼馴染の恋（1段落）を読む。

#### 〔第3・4時〕

「筒井筒」夫婦の危機2段落と「鹿鳴く声」を比べ読みし、中心人物（男）の変容を読む。

#### 〔第5・6・7時〕

生徒自身が「筒井筒」の男にインタビューする対談記事を書き、「筒井筒」の読みの深まりを実感する。

## (5) 実践授業における生徒の記録の分析

教材開発の意図と授業実践の手立てに沿って、生徒が授業中に書いたワークシートやホワイトボードの記録から、授業実践の成果と課題を分析する。

### ① 教材選択と焦点化

## (i) 作品理解及び自己との関わりの充実

比べ読み直後に、授業を受けて思ったこと感じたことを書かせた振り返りシートを見ると、「比べ読み」についての「難しい」「混乱した」などの否定的な意見はなかった。大きな成果は、全体80%の生徒が、小さい記入欄に対して、自分が作品をどう読めるようになったかという作品解釈についてきちんと触れていたことである。例えば、自分たちはこの点には気づけなかったのに、仲間はこのように読んでいて納得した等、非常に具体的に書いていた。さらにそのうちの35%が、自身の作品解釈を述べた後、それについての自分の感想を、自然につなげていくという記述の仕方をしていった。

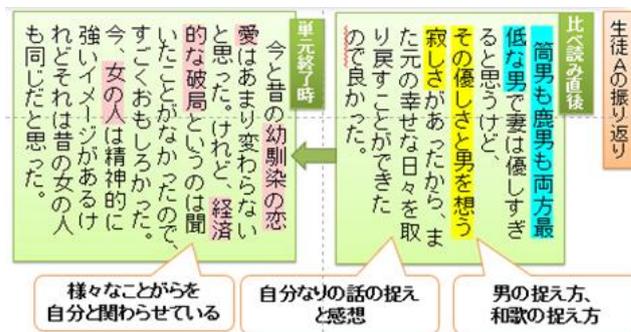


図1 生徒Aの振り返りシート

図1は、学習者の一人である生徒Aの振り返りの内容である。比べ読み直後の振り返りでは、二人の男の変容を捉えようという課題を受けて、二人の男についての感想を書いているが、そこから、男が感動した対象である和歌の内容や夫婦の生活について書いている。また、単元終了時の振り返りでは、作品全体を通して様々なことがらを社会や自分と関わらせている。

## (ii) 両作品に共通する「和歌」の捉え

生徒の振り返りシートから、歌物語である両作品に共通している部分、つまり、和歌への捉えが深まっていることが分かる。以下、和歌についての概念が捉えられ始めた2人の

生徒の記述を挙げる。

今よりも昔のほうが結婚や恋愛が自由だと思う。昔は歌一つで相手の心をつかみとてもすごいと思う。また今よりも壮大な恋愛だなと思った。

この生徒は、「歌一つで」という言葉に和歌の力を実感していることが表れている。「壮大な恋愛」という言葉から、この生徒なりの古典世界のイメージ、特に和歌によるドラマティックな恋愛のあり様を、自身の中に持ったことが分かる。

これを読んで、色んな手段で相手の本当の気持ちを知ることができていて、昔の男は色んなことをするんだなと思った。

この生徒は、人の心を詠うという和歌の本質について触れている。「相手の本当の気持ちを知ることができる」という言葉から、古人が自らの心情を伝える表現手段として、和歌を用いていたことを理解している。

これら以外にも、読み継がれてきた歌物語の実態や、貴族の生活に根付いていた和歌文化に関する記述なども見られた。複数作品を扱ったことで、その共通点が具体的なものとして考えられ、概念として生徒の中にあらわれはじめたのだと考える。

### (iii) 教材「鹿鳴く声」の課題

単元を通して扱った「筒井筒」の読みに比べると、「鹿鳴く声」の読みが深まりにくかった。授業者は、「鹿鳴く声」の男の変容について、「最初の妻に長く無関心だった男が、男女の恋を意味する鹿の声を妻と聞きながら、心を通わせ、妻の和歌を聞いて感性の同じ妻に改めて愛情を抱く」と読んだ。しかし、生徒たちは、鹿の意味するものを、知識として与えられてはいたものの、この男女の心情に関わらせて考えた生徒は非常に少なく、壁越しに会話している意図等についても、ワークシート等では活用されていなかった。

これを改善する教師の働きかけとして「鹿鳴く声」の「秋の夜の長きに目をさまして聞けば、鹿なむ鳴きける。ものもいはで聞きけり。」とその後の男女の小声での会話を、生徒たちがイメージしやすいよう、立場を決めて音読させたり演出させたりしていたら理解できただろうと考える。さらに、大和物語「鹿鳴く声」と同じ伝承をもとに書かれており、鹿の声に情趣を感じる最初の妻の様子が、新しい妻と対比的に書かれている「今昔物語集」巻30第12段「鹿の歌」を補助資料として使うことも考えられる。

### (iv) 登場人物の変容を表す愛情曲線の可能性

また、授業で二人の男の妻への愛情を場面ごとに数値化し曲線に表す試みも行った。図2・3は、同一生徒の描いた愛情曲線である。

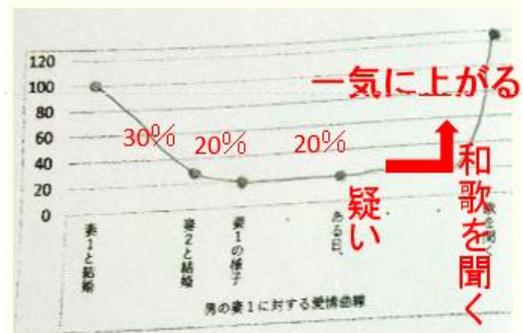


図2 生徒Bの描いた「筒井筒」の男の愛情曲線

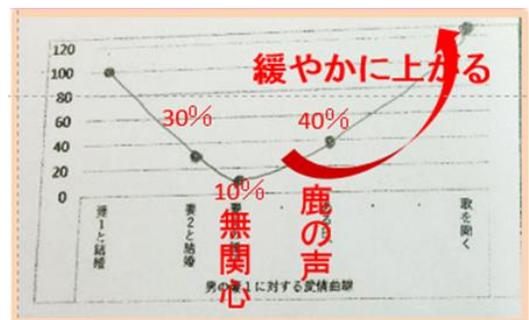


図3 生徒Bの描いた「鹿鳴く声」の男の愛情曲線

こうした視覚化されたものがあることで、比べ読みにおいては特に、グループ活動で生徒たちが場面ごとに違いを考えていく時、教師が生徒の読みの誤りや気づきの少なさを把

握する際などに有効だと考える。

## ② 学習形態の工夫

### (i) 個の比べ読みからグループ活動へ

生徒個々に、中心人物の変容について比較をさせた。作品内の文章表現を根拠に、男の違いを記述しているが、男の特徴を一面的に捉えたものが多かった。また2人それぞれの心情の変化を書いているが、両者を相対的に書くことは難しい生徒も2割程度いた。

個々に男たちの変容の違いを考えた後、少人数グループで話し合わせ、ホワイトボードにまとめさせた。図4に示したA班のホワイト

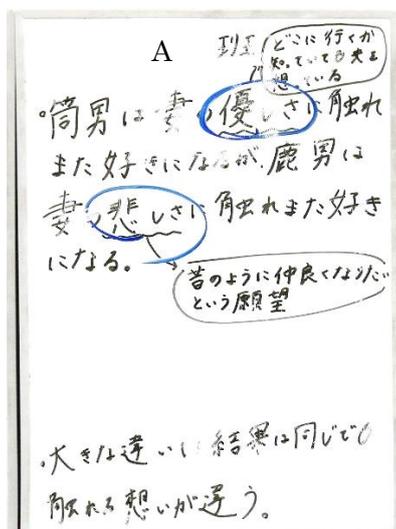


図4 A班のホワイトボード

ボードには、「筒男は妻の優しさにふれ、また好きになるが、鹿男は妻の悲しさに触れ、また好きになる。」と書いてある。この「優しさ」「悲しさ」というのはそれぞれの和歌の内容理解になるが、それぞれの個人の記述

には見られない言葉である。これは、和歌の内容、詠み手の心情、そして詠み手の立場など、複数の事象を考え合わせなければ出てこない言葉である。また、この「優しさ」「悲しさ」という理解を自分たちでさらに深め、それぞれどういう意味で述べたのかという説明を、付け足している。例えば、「筒井筒」については、「どこに行くか知っていても夫を想っている」という妻の優しさだと書いてある。最後に「大きな違いは結果は同じでも触れる想いが違う。」という言葉でまとめている。和歌に詠まれる繊細な心、その心に接して感動する人間性を捉えた表現であり、和歌の価値

や日本人の心性への気づきがあると考ええる。

### (ii) グループ活動から全体へ

グループごと書いたホワイトボードより、そこに捉えられた男の特徴について、筆者がその概略を表1にまとめた。全9グループのうちの主な3つである。

表1 ホワイトボードに捉えられた男の特徴

	A班	B班	C班
筒井筒	妻の優しさに触れて好きになった男	別の妻の元に通いつつ最初の妻が気になる男	妻が気になった時、疑ってこっそり覗く男
鹿鳴く声	妻の寂しさに触れて好きになった男	妻のことを全く気につけない男	妻が気になった時直接問いかける男

それぞれ自分たちの言葉で男を捉えているが、作品のどこに着目したかにまだ偏りがある。そこで、この全9グループのホワイトボードを、学習者全員で概観する時間を設けた。すると、個々に書かれた振り返りシートの記録から、2人の男たちの像が、学習者全体の中で同じ方向性で捉えられていったことが分かった。「鹿鳴く声」については、すでに(iii)で課題として記したが、「自己中心的で冷たい男」という捉えであった。「筒井筒」の男についてはもう少し丁寧に捉えており、「新しい妻を作っても、結局最初の妻のことがいつも気にかかり、疑うのも不安に思うのもそのためであり、妻の和歌を聞いたとき、男の中の妻への愛情を再確認する」といったような男の像である。個々の比較が一面的なものから始まったため、「皆の意見をまとめるとつながった。」という生徒の感想が見られた。また、生徒たちは男を捉える視点の違いやまたそれらをどう考えるかという違いに驚いていた。

### ③ 言語活動の工夫

二作品の比較の後、元の作品「筒井筒」の読みを、もう一度読み直していけるよう、生

徒自身から筒井筒の男へインタビューする対談記事を書かせた。

ある生徒は、「なぜ筒男さんは新しい妻を家に連れてこなかったのですか？」と「筒井筒」の男に対して質問し、自ら男になりきって、「嫌な顔をしない妻が妙に気にかかり、新しい妻を家に呼んで最初の妻に本当の意味で嫌だと思われなくなかった。複雑な気持ちだった。」と答えている。また別の生徒は、「なぜ新しい妻を、龍田山を越えた先に作ったのですか？」と質問し、「山をへだてることによって新しい妻の所へ行く時は、最初の妻を思い出さないかなと思ったから。」と答えている。新しい妻を自宅に呼んだ男の登場する「鹿鳴く声」と比べて読んだことにより、結婚形態への疑問が生まれたのである。「筒井筒」を単独作品で読む場合、古代の「通い婚形態」の説明を受けた生徒たちの多くは、それほど疑問を持たずにそれを受け入れると思う。しかし、同じ時代の別の男の異なる結婚形態を知ることによって、生徒の中に具体的な生活がイメージされ始め、さらにそこから、作品内の「河内」「龍田山」等といった対象物への疑問が湧き、意味付けが行われていったと考えられる。

このように、男の心理をたどりつつ、古典の世界を具体的にイメージし、この「男の特徴・性質」を捉えられていくことができた。

#### 4. 考察

「比べ読み」により読みが深まっていくのはなぜか。それは、二作品があるということでもまず相対化ができ、そして様々な相違点を一つずつ分析・整理し、複数の事象を組み合わせることで、比べなければ出てきにくい疑問・課題が生じる。こうした疑問に応えながら、自分なりの解釈を表現する中で、作品理解が進んでいくからではないか。

ただし、二つの作品では読みの偏りが出てくる場合がある。今回の実践でも両方が辛抱強い立派な妻の話であったので、「悪い女、よ

い男の作品も読んでみたくなった」という生徒の感想があった。そこで単元終了時に「筒井筒」と同じ伝説からできた「大和物語」の「沖つ白波」を紹介した。このように2作品を丁寧比べ、その上で3作品目を読んでいくことで、読みの偏りが修正されたり古典世界がさらに立体的に見えてきたりすると考えている。

このように比べ読みは、焦点化して整理・分析しながら目的を持って読むことができる。そしてここから比べる楽しみを感じ、主体的な読み手が育っていくと考えている。

#### 5. 研究の成果と今後の課題

「比べ読み」の焦点化により、対象を読み深めるという目的を持って、生徒が主体的に視点を広げ、その中で自分と関わらせて考えることができた。また、教師が学習形態の工夫や言語活動の工夫をすることにより、気づきを得て、読みを深める場面を多く設定したことで、作品理解が進んだ。

今後の課題として、合わせる2作品目のテキストにより、読みの深まり方がどのように違うのかという教材選択の研究が必要であると考えられる。共通点が多いもの少ないものでどう変わるのか、生徒の関心と合わせてどこに焦点化していくのがふさわしいのか等について明らかにしていきたい。また、比べた後の言語活動についての研究も、より効果的な形を求めて続けていく必要があると考える。

#### 6. 引用文献

- 船津啓治.2010.比べ読みの可能性とその方法. 溪水社.
- 川上弘宜.2009.「比べ読み・重ね読み」で「一人読み」.明治図書.
- 文部科学省.2009.高等学校学習指導要領解説国語編.文部科学省.
- 文部科学省.2016. 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）.